

松武 秀樹（まつたけ・ひでき）先生

シンセサイザープログラマー
一般社団法人演奏家権利処理合同機構 MPN 副理事長

1951 年生まれ。1970 年の大阪万博アメリカ館で、シンセサイザーとコンピュータを組み合わせて演奏されていた「スイッチド・オン・パッハ」を聴き、新しいフィールドに大いなる興味と関心を抱く。20 歳から富田勲氏のアシスタントとして、当時日本には数台しかなかった“モーグ・シンセサイザー”による音楽制作のスタッフを経験。独立後もシンセサイザー・ミュージックの可能性を追求、モーグ・シンセサイザー・プログラマーの第 1 人者としてロック、ポップス、CM 音楽のレコーディングに参加する。

1978 年、矢野顕子のアルバム『トキメキ』のニューヨーク・レコーディングにおいてデジタル・シーケンサーを使用。

坂本龍一のソロ第 1 作『千のナイフ』への参加をきっかけに、1978 年～1982 年にかけて、サウンド・プログラマーとして YMO

作品に参加し、数々の伝説的なレコーディングを経験。また、ワールド・ツアーを含めた YMO ライブにも帯同。通称“ダンス・シンセ”と呼ばれる巨大シンセを操りながら世界に大きな衝撃を与え、「YMO 第 4 のメンバー」と称される。

1981 年には自身のユニットである LOGIC SYSTEM を結成し、現在までに 10 枚のアルバムを発表。その内の 2 枚は世界 8 ヶ国でリリースされ、各地に熱狂的なファンを生み出した。2011 年に入り、再び LOGIC SYSTEM の活動が活発化。DJ HARVEY を筆頭に豪華リミキサー陣が参加した EP シリーズ第 1 弾『RMXROGIX』のリリースに合わせて、エレクトロニック・ミュージックにフォーカスを当てた新レーベル＜MOTION±（モーション・プラス/マイナス）＞を始動させる。

5 月の“FREAKS MUSIC FESTIVAL”、6 月に UNIT で行われたライブイベント“SPECTACLE”では会場を大いに沸かせ、アナログ・シンセのブツ太いサウンドでオーディエンスの体を見事に揺らし続けた。



《講義概要》

一般社団法人演奏家権利処理合同機構ミュージックピープルズネストの副理事長であり、モーグ・シンセサイザー・プログラマーの第 1 人者として活躍している松武秀樹氏が、「テクノポップスの進化とボーカロイド」をテーマに講義を行った。

講義ではまず、シンセサイザーの歴史とテクノロジーの発展について、詳細な資料を用いて分かりやすく説明し、電子楽器の進化が音楽文化・産業へ大きな影響を与えたことを示した。また、「電子楽器は扱う側の技術力が重要であり、アイデア次第で無限に可能性は広がり、今後も更に進化し続ける」と言及し、テクノポップスの奥の深さとその魅力を伝えた。

続いて、電子楽器を駆使した実演や有名なテクノポップスを実際に多数流しながら、ボーカルの録音・エフェクトの歴史について、歌がどのように進化してきたのか楽しく解説。近年開発されたボーカロイドの概要とその新たな試みについても最新の情報と今後の展望を伝えた。最後に、「クリエイターとリスナーとの音楽創造のサイクルを維持するために、魅力的な新しい音楽を生み出していきたい」と言及し、今後の電子音楽の進化がもたらす音楽文化・産業の発展と可能性について考えるきっかけを与えた。

《受講生の感想》

●1960年代からパソコンを駆使した新しい音楽が生まれていたことを今日初めて知りました。同じ楽曲でもボコーダーを使うだけでテクノのような世界観が出来上がり、声や音の表現の仕方だけで、こうも音楽の世界が変わるのかということに驚きでした。ポップスという大衆に受け入れられなければならない音楽には、こういったボコーダーの技術も使い、音楽をクリエイティブすることも必要だと思いました。

立命館大学・法学部・4回生

●ボーカロイドという最近になって流行り始めたという印象が強かったのですが、シンセサイザーの歴史から見るとずっと昔からその根本は音楽界ではあったのだと知り、音楽の歴史の深さを感じました。楽器の音や歌手の歌声だけでなく、パソコンも音楽となりうるなんて技術の進化はすごいと思いました。この音楽の多様化で今後の音楽業界や文化がどう変わっていくのか楽しみです。 立命館大学・映像学部・2回生

●今まで何気なく聴いていた音楽にも様々な機械の機能が使われていることが分かりとても面白いと思った。ボーカロイドをはじめ、これから先このような技術は無限に成長し、広がっていくだろう。人々が驚く、カッコ良い音楽が世界中にどんどん生まれていくことがとても楽しみになった。実際に一つの音楽ができるまでを見ることができて、さらにボーカロイドの質の高さを実感でき、本当に感動した。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●聴きなれた曲でもボコーダーなどの機械を通すと全く異なる音楽に聴こえておもしろいと思った。ボーカル録音によって人間の声だけでは作りだすことができない音楽のジャンルが作られているのだと改めて感じた。ボーカル録音によって自由自在に音楽を変化させているのを実際に聴いて、技術の発展を感じたし、これからどう進化していくのか楽しみだと思った。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●このシンセサイザーという方法で音楽の色々な方向性を感じた。ごく最近の技術だと思い込んでいたが、70年代からある技術であり、それは今でも進化している。だからこそ、ボーカロイドのような今までにない革新的な技術が生まれ、そこからまた新たな技術が生まれていくのだと思う。また、先生がおっしゃっていた「(シンセサイザーという技術は)扱う者によって価値が変わる」という言葉が印象的であった。

立命館大学・産業社会学部・3回生

●オートチューンとはどのようなものなのか、そして、昔と比べて音楽がどのように変化してきたのか実際に聴きながら感じる事ができた。そしてそれらは海外アーティストだけでなく、日本のアーティストにも多く使われ、音楽の楽しみ方の幅がすごく広がってきているように感じた。そしてそれらは、未来に行くともっと新しい音楽の世界が広がるのではないかと感じ、すごく期待が高まりました。

立命館大学・産業社会学部・2回生

